

## 【よく食べる牛は良く乳を出す？！良く乳を出す牛は良く食べる！】

どちらが正しい言葉であろうか？簡単に同じと考えてしまいがちではあるが、実は奥が深い言葉でもある。乳牛は分娩後急速に乳量を増やす。それに伴って採食量も増えるが、乳量の増加にはとても追いつかない。ところが病気などで乳量が上がらない牛は、当然採食量も増えない。採食量上げる一番の要因は、分娩後の泌乳量である。泌乳量が多ければ、牛はお腹が空く。母乳で子供を育てた母親は容易に理解できると思う。

理解が難しいかもしれないので、たとえ話で記す。力仕事をする人は、「どんぶりご飯」を軽く食べることができる。しかし、「どんぶりご飯」を食べる人が皆力仕事をする人には限らない。ただの大食漢のデブかもしれないし、やせの大食いかもしれない。「どんぶりご飯」を食べられるようにしたいと思えば、力仕事をするべきである。毎日力仕事をすれば、そのうちにエネルギーが足りないこと（お腹が空く）が判り、食事量を増やさないといけなくなる。急には無理であるが、次第に食事量は増えてくる。この力仕事に相当するものが、牛では泌乳である。一方力仕事をしていて「どんぶり飯」を食べられる人が、急に力仕事を辞めたらどうなるであろうか。仕事を辞めてもしばらくは「どんぶり飯」を食べられるが、エネルギー過剰となるので次第にご飯の量は減ってくる。最後には普通の人と同じご飯の量で満足するようになってしまう。この状況は乳牛では泌乳中期以降で、乳量の上昇が止まっても採食量が維持されているので、泌乳量を維持できるようになる。

このたとえ話で判るように、乳牛の採食量（どんぶり飯）を上げようとするには、分娩後の乳量（飛び出し乳量）を高くする工夫をすることである。この飛び出し乳量が高ければ、乳牛は体を削りながら泌乳をして、お腹が空くことを覚える。その後次第に採食量が増えてくるようになる。

この理論から理解しなければいけないことは、分娩後ルーメンスコアが低いままの牛は、産後の病気をした牛であり、この先もあまり回復は望めない。当然ながら泌乳量も低い牛である。乾乳期の管理方法を見直し、その結果として飛び出し乳量上がる改善が必要である。そのためには乾乳期を通じてルーメンスコアが低下しないようにすることが重要である。



つなぎ牛舎でTMRを給与する場合、特に注意しなければいけないことがある。TMRなのである程度の量（1日2回給与であれば、1日量の半分）を飼槽に置く。多くのTMR量を飼槽に置かれた牛は、ある時間採食すると反芻を始めるようになる。これは他の牛にTMRを取られるという心配がないので（競争がない）、一度に多くのTMR量を食べようとはしない。この反芻を見て、もう我が家の牛はお腹一杯と判断してはいけない。時間をかけて多くの量を採食するので、TMRは目の前において置かねばいけない。つなぎ牛舎では多分に人の判断が乾物摂取量を左右する。餌寄せなどの採食刺激も重要である。